

寺屋敷の處、元祿十三年三世繼譽心岩和尚屋敷替奉願、日蓮宗法蓮寺跡屋敷可被下旨被仰出、拜領仕由舊記に有之。と記載す。延寶の金澤圖に、則ち翠雲寺の寺地をば大圓寺と書載せたり。翠雲寺は極樂寺の向ひにて、前口十三間二尺奥行十三間三尺とあり。按ずるに、享保元年に建つる山脇節夫の碑文に、君卒之月。葬城南野田村大圓寺。とあり。山脇氏の歿せしは、正保五年四月也。此の碑文に據れば、初め野田村にありたる如く聞ゆ。但し正保五年は寛永の後なり。寛永元年に泉野に寺地拜領と寺記に載せたと符合せず。可追攷。

○中興心岩和尚傳

龜尾記に云ふ。大圓寺中興繼譽上人心岩和尚は、俗姓加波氏にて、念佛三昧に入りて大圓寺を中興し、佛勅により佛御前の鉦鼓を能美郡佛原より掘り出し、今に當寺に傳來す。佛御前の守本尊の觀音もありしかど、子細ありて今は大聖寺町山下の光覺寺にあり。心岩和尚は畫圖に妙を得たる人にて、自畫寺中に傳來すといへり。今按ずるに、右鉦鼓の事は、彼の由來書に云ふ。心岩和尚常念佛を發起せら

れ、寺中僧員六十人常に在住、六僧宛一時換りに勤めけり。心岩和尚は晝夜椅に懸り不寢、夜分は暫時目を閉ぢ、心氣を休めらる。然るに夢とも現ともなく、佛御前來りて告げて曰く、能美郡原村の内に流水有之、流水中ケ様々々の處に鉦鼓埋りあり。掘り得給へかすと云々。和尚其告にまかせ、即其所に行き見られけるに、夢の告に少しも異ならず。其所に雲氣立登る。從僧是を見て、あれは何にて候哉と問ひけり。心岩是は光明也と見留められ、即其所を掘らせられしに、一箇の鉦鼓を掘り出せり。原の里人曰く、佛御前住居の草庵焼失の頃埋もれたるか。焼失より既に四百年許相立つよし。色黒く、木工のやうにて音もせず。和尚取り戻られたり。さて心岩は江戸將軍家大奥へ所縁ある人なる故に、即右鉦鼓も大奥へ上げられる處、追つて返し被下、大圓寺の什物となし、寶藏へ納め置きけり。然るに寶曆九年四月の火災に、大圓寺佛閣悉く類焼すといへども、寶藏は火難を遁れ、鉦鼓等の什物恙なく、毎年五月廿四日に寶物披露、諸人へ一覽をなさしむるを例とすとあり。安永八年三月能美郡澤村の邑長源次等より書き出せる原村佛御

前由來書に、佛御前所持の守佛有之處、如何之譯に候哉大聖寺町正覺寺の寶物に相成居、尤靈像の由承傳仕候。又佛御前所持の擲鉦は、金澤泉野寺町大圓寺の寶物に相成居候由承傳仕。と書載せたり。又心岩和尚の畫圖に長ぜし事は、今寺中に傳來せる畫共にて知られけり。舊藩五世參議中將網紀卿の時、藩士吉田澁右衛門軌中より、心岩寫す處の能登國佳景繪卷物二卷を一覽に供しけり。添狀溫故遺文卷十八に載せたり。其の書に云ふ。

五月十三日

吉田澁右衛門

堀 作 兵 衛 様

此の卷物二卷、能州景所之繪圖に而御座候。是者、御當地大圓寺之心岩和尚、元祿年中能州相巡り不殘見物仕、其時所々滯留仕、此繪圖自筆相調被申候。其以後寶永元年之春、私大圓寺に罷越候處に、咄之次手此繪圖之事に及候に付、致所望二覽仕候。心岩被申候者、此繪圖、詩歌等心懸候方を爲見、題詠を乞候てくれ申候様にと頼に御座候。左候はゞ私に御預け候様に与申候て受取、私方に指置申候。其後心岩被申候者、日外預け申候繪圖相返し可申候。江戸に致持參、松平美濃守殿に懸御目申度候。品により一位様に入御覽候事茂可有御座之旨被申候。私其時分申候者、御

領國之内之圖に而候間、江戸杯に御持參、他見御無用之儀存寄候條、被止可然旨申候へ者、兎角持參仕度候旨、相返候様に与被申候へ共、達而御無用に候間、先預り置可申候与申指置候。其年心岩江戸に罷越、寶永三年八月於江戸死去被仕候。其分に而直に私方在之候。繪圖之内所々詩作杯茂御座候。則心岩作に而御座候。若乍憚御慰に茂可罷成物に候はゞ、御覽にも入申度奉存候間、不苦儀に候はゞ、大野木舍人殿に被懸御目可被下候。以上。